



永遠のアダム／エーゲ海燃ゆ／*L'Archipel en Feu* (1884), *L'Eternel Adam* (1910) / ジュール・ヴェルヌ(江口清・佐藤功訳)パシフィカ(8/6刊・¥1,200)

短、中編二作が収められた作品集。

このうち、中編「エーゲ海燃ゆ」は、ギリシャ独立戦争の時代を背景に、海賊掃討を描いた海洋冒険もの。ヴェルヌにはめずらしく、空想的飛躍が少ない。一方、「永遠のアダム」は、ヴェルヌの晩年に書かれ、死後出版された事実上の遺稿である。

遠いはるかな未来、一人の科学者が、庭から古代の日記を発見する。その日記には、古代(すなわち、我々の現代)のある日、突然の地殻変動により、世界が全て水没し、人類が壊滅したことが記されていた……。

文明が滅び、生き残った少数の人々が、また再びアダムとイヴとして、明日の世界を生み出していく——SFで、あまりによく知られたバターンの典型が、ここに見いだせる。

巻末のエッセイは、ヴェルヌが他のSF作家と比較して、あまりにも科学に忠実でありすぎた、と指摘している。それだけ、現実からの演繹(えんぎやく)(科学)にこだわったのだ。しかし、本作のように、現実の文明、科学が、はるかな過去からの輪廻(りんご)に繋がっているにすぎないと悟るあたりに、ヴェルヌの幸福とはいえない晩年を窺い知ることができよう。

(俊)